

小 塩 力 著

聖 書 入 門



岩 波 新 書



小 塩 力 著

聖 書 入 門

岩 波 新 書

226

小 塩 力

1903年群馬県に生まる

1926年東京大学農学部卒業

1928年東京神学社神学校修了

専攻—新約学

現在—井草教会牧師，日本聖書学
研究所所長

東京神学大学，津田塾大学，

農村伝道神学校，各講師

著書—「代禱—説教と短章—」

「新約聖書神学辞典」(編著)

「時の徴」(福田正俊と共著)

「高倉徳太郎伝」

聖書入門

岩波新書(青版) 226

昭和30年12月16日 第1刷発行

昭和31年2月20日 第4刷発行

¥ 100.

著 者 小 塩 力

東京都千代田区神田一ツ橋2-3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布385

印刷者 山 田 一 雄



発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

はじめに

——「セイショ」って、いったい、どういう本なのですか。

こういう質問にあって、とうわくしない人があるうか。なぜなら、質問者の気持やねらいが、十人十色だからである。「これが聖書です。お読みになってごらん下さい」。こういって、聖書を差し出してみても、それだけでははじまらない。新しい口語訳聖書で、総計一七〇〇頁以上もあり、そのなかに六六の独立文書が並んでいて、さて一言の説明語もないからである。もし、何を聞こうとするのか、どういう態度でたずねるのが、すこしでも分れば、いくらか方途も立つであろうが。

——聖書は、どうしてできたのですか。

質問の範囲が、この程度にでも縮められると、歴史的知識をあつめととのえて提示すれば、いちおうは責任をはたしやすい。それにしても、まとまった一つの書物としての成立事情を明

かにすると、そのなかの諸資料が形づくられた過程を確かめるのでは、方向にずれがある。また、このような文書をうみだした母胎である、民族や社会集団の、歴史の実体をとらえるにしても、その社会学的現実と宗教的現実とが、必ずしもかさなるとはいいいかねる。かような困難にもかかわらず、本書の内容の半ばは、こういう質問への答のつもりである。

——聖書は、西欧文化の真髄に触れるためには、どうしても知っていなければならぬのでしょね。

そうですね、と肯定するのは、あたりまえのようである。たしかに、西欧の歴史と文化を理解しようとするかぎり、キリスト教を除外したら、まったく見当ちがいになるおそれがある。キリスト教の經典たる聖書の、ことばや考えかたが、欧米の思想や文学のなかに滲みとおり、その社会習慣などを規定していることも、あきらかであろう。キリスト教信仰が、教会という特別な社会集団のかたちで結集し、二千年の西欧の歴史と倫理とを特色づけたことは、じじつである。

しかし、反面において、聖書は、ここでほんとうに残りなく解明されたのだろうか、と質問しかえされるかもしれない。いままでに、聖書の真理は、その全貌をあらわにしているのだら

うか。わたくしどもは、聖書のなかに湛えられている深い真理のある部分には、東洋をはじめ異教諸民族の深刻な疑いや新鮮な問題提起と接渉して、はじめて明かになるものがあると思う。そういう点に、本書は、若干の示唆を提供しようとした。

——聖書は、それではいったい、どんな本なのか。

最初の問が、内容と目標と特色とについて、ひとまわり進展したとする。こうくりかえすにつれて、われわれは、聖書に関して、「宗教的」な文書を予想し期待していることに気づく。よし、賛否の別はあろうとも。科学や芸術の教科書でないことは確かなのだし、宗教經典といつて間違いではない。しかし、ここに問題もひそむであろう。

バイブルといういいかたが、今日でも、いっばんに流通している。これによって、聖書は、もと、ただ「書物」にほかならぬこと、に注意すべきである。ただ、われわれの敬虔の情を投射して、形容語「聖」を附加せずにおられなかった。それが一般化して、聖書といえば、キリスト教の經典である新旧両約の書を意味するようになっていく。けれども、この書は、一つの宗教書であることに満足しないであろう。聖という語のもつ超越的な意味内容が、あらためて、考えられねばならぬ。人間の、きわめて人間的な書であることによって、そのまま、神の

「啓示」という特別な、超越的ともいうべき事実と真理とを含んでいることを、主張せずにはおられない。人生の根柢には、一般原理のかたちではなしに、人格的事実として人格的に出会うほか、その秘奥に触れるすべのないもののあることを、聖書は示す。知識からはいって、ついに全人格的に触れてくるものが、ここにある。こういう方向を、本書は、ほのかにでも指し示したいと、念じている。

一九五五年一月三日

小 塩 力

なるべく、はじめてのかたに、聖書にたいする興味をもっていたきたいと念願して、筆をとったつもりである。しかし、志していたほど平易には、書けなかったかとおそれる。とくに、頁の分配をたくみにできなかったために、ひじょうに重要な文書、パウロの手紙については軽くふれるだけになってしまった。またの機会を期待していただきたい。

なお、附録として、本文と正典について略述した。これは、Ⅱ旧約聖書、Ⅲ新約聖書のまえに、通読してくださることを希望する。

凡 例

- 一、聖書の引用は、原則として、日本聖書協会発行の「口語聖書」によった。
- 一、しかし、必要の場合まれに、元訳その他のいいまわしによったこともある。たとえば、旧約聖書で、もとならばエホバとあったところ、口語訳では「主」と統一している語を、厳密を要するときには、しばしば「ヤハウェ」と書いた。
- 一、固有名詞は、聖書に出てくるものは、原則として口語訳の読みかたにしたがった。他のものは、それぞれの国の発音からあまり遠くないようにと心がけた。
- 一、聖書の書名や章節において、省略の要をみとめたときには、略符号を用いた。たとえば、「テサロニケ人への第一の手紙二章一三節」は、テサロニケ一・一三、「列王紀下一〇章五節」は、列王下一〇・五、というふうに。
- 一、巻末に、簡略な年表、地図、索引を附した。

目次

I 聖書と世界	一
---------	---

一 欧米文化と聖書	二
-----------	---

二 東洋精神と聖書	七
-----------	---

II 旧約聖書	一三
---------	----

一 その成立の背景	一三
-----------	----

二 旧約諸文書	二三
---------	----

イ 六書	二三
------	----

ロ 預言者	三三
-------	----

ハ 諸書	八七
------	----

Ⅲ 新約聖書……………一〇五

一 その成立の背景……………一〇五

二 新約諸文書……………一二四

イ 福音と福音書……………一二四

ロ 使徒行伝……………一三九

ハ パウロの手紙……………一四二

ニ 公同書簡、その他……………一四九

ホ ヨハネの黙示録……………一五七

Ⅳ 聖書の特徴……………一六五

一 唯一神……………一六七

二 仲保者……………一七一

三 罪と死からの救い……………一七四

四 虚無からの脱出 一八五

五 新しいヒューマニズム 一九一

附 録

本文および正典について 二〇一

年 表

索 引

1 聖書と世界

自然と歴史とから成っているこの世界に、聖書とよばれる一冊の書物は、どのような意味をもつのであるか。キリスト教とよばれる一つの宗教形態を、この社会のなかでつくりかつ保ってきた特別な集団が、いちばんの拠りどころとしている聖書は、ある個人やある時代にとってはゆかりがあるとしても、他の人々また他の時代にたいしては無縁なのではあるまいか。この書の特徴をあきらかにすること、すなわちその成立や内容や影響について知ることが、われわれの現在と将来の生活にとって、どれほど必要であるのだろうか。すぐにも、このように問いかえしたくなるのであるが、もしわれわれが過去の歴史を厳正に反省してみようとするなら、そして現在の歴史を真実に形づくろうと決意するなら、問いははげしく跳ねかえってくる。聖書は、わたくしにもあなたにも、信仰者にも無信仰のひとにも、西洋にも東洋にも、きわめて重い意味と欠くことのできない関わりとをもつのであると。わたくしは、とりあえず次の二点

にかぎって、聖書と世界との関係交渉を示してみたい。

第一は、ヨーロッパ、それにアメリカをも加えた文化圏と、聖書との関わりである。第二は、欧米にたいして東洋として対立させられる地域の、精神的風土と、聖書との関係である。そこから、人間の歴史とその土台をなしている自然とが、まともに背負っている問題、世界の問題そのものと、聖書との関係があきらかになるであろう。

一 欧米文化と聖書

ヨーロッパの世界が生んだ第一級の文学で、われわれにもよく知られているものに、ダンテの「神曲」、ミルトンの「樂園喪失」、ゲーテの「ファウスト」がある。これらはみな、詩のかわたちで、われわれの生の根本的な問題に触れようとしている。人間の行為や愛や、人格的邂逅の秘義や世界秩序のゆたかさなどを、比類すくない深さと美しさをもって描いていることは周知のとおりである。ところが、著者たちの意図するところにしたがえば、かれらの人間的限界や文学表現が現実にとここまで達したかどうかは別として、その意識しての主題設定によると、

次のようなことがいえそうである。すなわち、それは、明確に「神的喜劇」であろうとしたり、「人間の世界のなかで神の摂理のただしさを証明する」ことを主題としたり、またはほのかにはあるが「超越的実在のはたらき」の無視できぬことを示そうとした。いいかえると、これらの文学は、それぞれの時代の問題に接触して、そこで二つの全く異質的な要素が葛藤し、共存し、総合しようとするありさまを、描こうとしたものである。この二要素を、一個の人間のうちに共存する精神性と情慾性としてとらえることもできようし、ひろくヒューマニズムとキリスト教として把握することも可能であろう。それを、もすこしつづめていえば、ギリシャ・ローマの古典から滲み出る精神と、新旧約聖書に凝集しているキリスト教として、対峙せしめることになる。ヨーロッパ内部における、民族あるいは国家の興亡や盛衰はめまぐるしいほどであったとしても、ヨーロッパ全体は、いちおう一つのまとまりをなして、ながいこと世界史の主流を形づくっていた。古代、中世、宗教改革およびルネッサンスの時代から近世、近代、そして新しい地域に古い血が更新されてめざましい歴史が成立しようとしている現代まで、この二要素は、あるいは顕わにあるいはひそやかに、世界史を縫ってきている。

透明な光のこぼれるような、地中海をめぐる地域は、古典ギリシャの爛熟しきずれるにつれて、剛健なローマの法制と政治との力におおわれた。しかし、ローマは、ヘレニズムのかたち

でのギリシヤの文化を盛る器であるにすぎなかった。ちょうど、そこへ、東洋の西のはてに位し、同じ地中海を暗いと感じる、セム族の一つのわかれが、ヘブル的（またはヘブライ的）とよばれる精神を、歴史的に具体化して、登場してきた。国家の壊滅という運命の混乱から、かれらは、やむをえず、宗教教団としてまとまるほかなくなり、いわゆるユダヤ教を形づくった。キリスト教は、この民族宗教の内側にそだち、おなじものの分派として存在していたのだが、できるだけ本質を純粹にしようとするねがいと、現実の一般大衆や奴隷階級に救いをもたらす意慾とが一つになって、いつしか他から「キリストのともがら」として嘲られ、迫害され、新宗教とみなされるにいたった。そこには、はじめから、ヘブル的ヒューマニズムともいうべきものがあつた。人格的な真理をいいあらわすことが、ただちにまた、下層被圧迫者たちへの救いとなつた。キリスト教における、真理表白すなわち「あかし」が、ただちに「殉教の死」を意味するにいたつたのは、ことばの遊戲によるのではない。ギリシヤ語の証しと殉教の両語が、同一語根をもっていること、したがって、その後のヨーロッパのことばもほぼ同じように用いられていること——これは、ことがらと言語との、同一と変遷との関係を示す。

古代東方の専制的な国家群にはさまれて、艱苦の連続を経験した、この弱小民族が、わずかに絶対権力にたいしてとつた抵抗策、そして、それを、思想的・信仰的に醇化し昇華した結果

ともいふべき「終局史的」（エントゲジヒトリツヒ）期待が、キリスト教を真実ならしめたのである。この宗教が、その内容の本質からと、歴史的発展の必然とから、種々の階層に滲透していくのは当然であつたろう。そして、数世紀を経ぬうちに、この宗教教団の、人格的交りと教會的組織とが、ローマ帝国の政治的交通路よりも、確かになり、迅速に、真理伝達の役割をはたすにいたつた。そこで、ローマはキリスト教を公認せざるをえなくなったのである。この前後、ギリシヤ的思惟、ローマ的生活になじんでいたものたちは、これらをキリスト教的なものと対決せしめ、新しい生活と新しい思想を確立すべき課題を自覚した。「使徒後教父」（アポストリツク・ファザーズ）（使徒たちの死後、教會指導の任にあたつた主な人々をいう）、その次の時代のギリシヤ系およびラテン系の指導者たちはみな、ギリシヤ・ローマ的なものと、かれらが聖書にてらしてキリスト教的と考えたものとの間の、批判や綜合をおこなつたのである。そのしかたが一方に傾きすぎたり、あるいは極めてかたくななものになつたとしても。

両要素を、かぎりなく深く追求して、しかも調和的にとりあげえたのは、古代末期から中世への、かけはしとなつた、アウグスティヌスである。地中海に面する、北アフリカの小さい町に、紀元四世紀半ばから五世紀にかけての七十余年の生涯を、美しく生きたこのひとは、哲学者・神学者・教會指導者として、おどろくべきはたらきをした。初期の哲學的著作、「美と適

合」や「ソリロキア」や「秩序論」や「自由意志論」から、晩年の「三位一体論」、「神国論」、説教、手紙、論争文にいたるまで、問題の所在と意識は相当変化したけれども、聖書にもとづくキリスト教的生きかたはますます強固になり、しかも同時にギリシヤ的な問題の重みを背負いきったというべきである。

爾来、中世教権時代も、プロテスタンティズム確立以後も、モラリストや無神論者の輩出したときも、西欧の世界が、この二つの要素をはなれては、まったく成り立たなかったことを、跡づけることは容易であろう。トマス・アクィナスの神学における聖書とアリストテレスとの綜合のころみにしても、遠くとんではニイチェの古典ギリシヤにかえろうとした「反キリスト」的努力も、積極と消極、調停と傾斜、肯定と否定のちがいはあっても、同じ要素がここにあるのである。

個人の倫理においても、社会慣習においても、一方にはギリシヤ・ローマ的精神が、他方にはキリスト教精神が、さまざまな変曲を奏でる。このキリスト教的生活、ないしは考えかたの根源は、いうまでもなく聖書だというべきである。西欧の近代社会の鮮明な特色をなす自我意識も、よかれあしかれ、キリスト教によってうながされた、人間の個性的人格存在の自覚のあらわれにほかならない。これが、博愛・平等の精神をうんだ。したがって、社会秩序を重んじ、